



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	屋良朝彦 『メルロ=ポンティとレヴィナス―他者への覚醒』 (東信堂)
Author(s)	大小田, 重夫
Citation	哲学, 40, 81-87
Issue Date	2004-07-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35023
Type	departmental bulletin paper
File Information	40_RP81-87.pdf



屋良朝彦 『メルロ・ポンティと

レヴィナス——他者への覚醒』(東信堂)

大小田 重夫

メルロ・ポンティの哲学において、「知覚」はあらゆる存在者の「存在」を与える根源的な機能と見なされ、他者は「知覚」によって開かれる世界で自己や事物とともに共同存在している。他方でレヴィナスの哲学において、他者の他者性は知覚を含めたあらゆる「知」の形態を超越し、「存在」の地平をも超越してゆく絶対的超越と見なされている。本書は、後期M・メルロ・ポンティの「肉」の存在論とE・レヴィナスの主張する超越的他者との両立可能性を論証するという大胆な試みである。

本書の価値は、次の点にある。この試みのなかでレヴィナスのメルロ・ポンティ批判やデリダのレヴィナス批判を起点とする他者論に関わる現代フランス思想の論争に、著者独自の回答を与えたこと。さらには、断片の集積でしかなかったメルロ・ポンティ晩年の草稿から、「肉」、「裂開」、「可逆性」、「切迫」、「交差配列」など彼固有の概念によって特徴づけられた「存在」概念に著者独自の解釈の方向を示し、そこから他者論を構成したことである。こうした成果によって、著者の立論は十分な説得力を持つものとなっている。

本書は、三部から構成される。第一部においては、遺された草稿をもとに、他者論に関して可能な限りメルロ・ポンティの後期思想が再構成される。第二部は、「存在」のイポスターズ(実体変換、hypostase)という概念の検討を通し

て、レヴィナスの他者論の解明がなされる。第三部では、本書の課題であるメルロ・ポンティの共同存在論とレヴィナスの言う他者の絶対的超越性との両立可能性が示される。以下において、三部それぞれの内容を簡潔に紹介し、最後に若干のコメントを付け加えたいと思う。

第一部 メルロ・ポンティにおける身体と他者

第一章 知覚・言語・へ存在

現象学とは、あらゆる意味の根拠(Grund)を確保するために、現象学的還元(反省)という操作によって意味の源泉(Grund)にまで遡り、意味の湧出する現場を捉えようという試みである。しかし、メルロ・ポンティによれば、還元は必然的に未完結に留まるが、この未完結性は現象学的方法の挫折ではなく、還元不可能なものとしての野性の「へ存在」の豊饒性を露わにする。したがって、超越論的観念論から存在論への転換は不可避である。

第二章 前期・中期における自己と他者

他方、中期メルロ・ポンティの対話の現象学では、言語とは他者とのコミュニケーションを成立させるための最大の手段であり、そこで「他者に語りかけること」と「語りかけられること」、能動と受動との峻別が無効となる間主観的・共同存在論的な地盤が露わにされる。しかし、メルロ・ポンティは「何かを語ること」の可能性の条件の問いに拘束され、「何か」に対立する「誰か」の契機、対話そのものを可能にする「他者の呼びかけ」を看過していた。

第三章 自己と他者

さらに、メルロー・ポンティは彼の後期存在論で、幼児のアニミズム的心性やアンドレ・マルシャンの言葉を引きながら、「もはや誰が見、誰が見られているのか、能動と受動がほとんど判然としない」という自―他癒合的な事態を根源的な事実と見なす。「他者を見る」（触れる）―「他者に見られる」（触れられる）というパースペクティヴの逆転可能性、すなわち知覚の「可逆性」（réversibilité）の分析を通して、「他者の存在の了解」と「自己の存在の了解」とが同一の「可逆性」の働きによって成立することが示される。

第二部 レヴィナスの他者論

第一章 レヴィナスの存在論 ― 同一性から自同性へ ―

他方、レヴィナスの〈存在〉概念の本質は「自同性」（*mêmeté, Selbigkeit*）と捉えることができる。「自同性」は他項と比較するための外部をもたない。むしろ、自同性は外部と内部の区別以前にある。その自同性の内部で様々な差異が生じ、項の複数性が生じるのである。レヴィナスは存在の自同性における存在論的差異から主体が誕生し、身体が成立するという過程を「イポスターズ」と呼んだ。

第二章 自己から他者へ

レヴィナスのいう「主体」はいまだ他者と出会うことのない孤独な主体である。そうした主体が端的に他者と出会うのは、エロス（性愛）と対話の場面である。他者はエロスの関係において所有不可能なものとして私を超越していくが、〈存在〉の彼方へと向かう超越ではない。エロスの関係は「所有する―所有される」という所有可能性のカテゴリーによつ

て規定され、存在論的カテゴリーの内部に回収される。他者との対話に関して、レヴィナスは上述のメルロ＝ポンティの見解を批判して、「他者に語りかけられること」、すなわち「他者の〈顔〉による呼びかけ」が私の語りかけに絶対的に先行し、存在了解にも先行すると主張する。

第三章 存在と他者

こうした主張に対して、デリダはM・ハイデガーに依拠しつつ、他者の〈顔〉の呼びかけは本当に存在了解を超越するのかと反論する。すべては「存在が存在を語り、思惟する」という〈存在〉の再帰的構造において捉えられる以上、〈存在〉の外部は語ることも思惟することもできないからである。しかし、何がそのような〈存在〉の働きの生起を促すのであろうか。レヴィナスはそれを他者の〈顔〉であると答える。レヴィナスによれば、他者の〈顔〉によって呼びかけられることは、けっして存在論的に了解可能な体験ではなく、むしろ存在了解そのものを作動させるものとして、存在了解を超越する。

第三部 メルロ＝ポンティにおける他者の可能性

第一章 メルロ＝ポンティとレヴィナスにおける「思考されざるもの」

以上の考察に基づいて、著者はメルロ＝ポンティの後期存在論とレヴィナスの絶対的他者が両立可能であることを論証しようと試みる。レヴィナスの「存在」のイポスターズ」という概念とメルロ＝ポンティの「〈肉〉の裂開」すなわち能動―受動への知覚の分岐は、ともに野性の〈存在〉から多様な存在者が出現する過程の発生論的存在論的解明を目的とする。しかし、メルロ＝ポンティにおいては、なぜ「存在の裂開」(déniscence)が生ずるのかは「問われざる問い」

であった。他方、レヴィナスによれば、「存在」のイポスターズを触発するのはまさに絶対的他者である。ここに、両者の他者論を基に新たな他者論を構築する存在論的基盤がある。

第二章 メルロ＝ポンティの他者論に関するル＝フォルとレヴィンの論争

「肉の裂開」は原初的には知覚の「可逆性」として発現する。後者は自己と他者とともに「見る―見られるもの」として成立させる共同存在論的機能を果たす。この他者と可逆性との関係に関して、C・ル＝フォルは他者が出現するのは、そうした「可逆性」の外部にある言語においてのみであると主張した。これに対して、D・M・レヴィンはまさに知覚世界において他者が出現するのであり、可逆性は他者と共に他者と同時に成立すると反論する。この論争に対して、著者はレヴィンを支持するが、他者はまさに可逆性を成立させる契機であるから、可逆性の枠内を超越すると指摘する。

第三章 可逆性とは者

メルロ＝ポンティのいう「肉」の裂開は、「野性の存在」のなかで可逆性が作動し、さまざまな存在者が出現するとともに自ら他の分岐が生じる一連の過程である。しかし、なぜ裂開が生じるのか。この「問われざる問い」に対して、著者はレヴィナスにとって他者の「顔」の呼びかけが存在のイポスターズを作動させるのと同様に、「他者による呼びかけ」を「肉」の裂開を触発するものとして要請する。それは「肉」を裂開させ、可逆性を作動させるものであるかぎり、「肉」の存在論の内部に解消されえない。むしろ、「存在」に対する超越である。

以上のように著者は、メルロ＝ポンティの「肉」の存在論はレヴィナスのいう絶対的他者の契機なしには成り立たないことを示すのである。

すでに述べたとおり、本書は、〈肉〉、〈裂開〉、〈可逆性〉、〈交差配列〉、〈切迫〉などメルロ・ポンティの未完の思考を形作る神秘的な諸概念に明解な解釈を与え、断片の集積でしかなかった彼の晩年の草稿に一貫した解釈を与えたという意味で、メルロ・ポンティ研究史上の大きな成果であることは間違いない。他方で、著者自身、何度も繰り返すように、メルロ・ポンティとレヴィナスとの思想上の相違が存在するがゆえに、〈肉〉の存在論と超越的他者との両立可能性を論証することによって、ヘブライズムを背景とするレヴィナスの思想の衝撃力が減じてしまうという印象が生ずるのは避け難いであろう。

メルロ・ポンティの〈肉〉の存在論においては、自己と他者は、「感覚する他者—感覚されるわたし」、「感覚するわたし—感覚される他者」というねじれたかたちで形成されてくる。この過程を、メルロ・ポンティは「交差配列」と呼ぶのであるが、著者はこの過程を見事に描出して見せる。なぜ、一挙に「感覚するわたし—感覚する他者」、「感覚されるわたし—感覚される他者」というように直接的に平行して自己—他の分節化が進行しないのであろうか。それは、感覚されるものに人称性、自己—他の区別を与えるのは、まさに「感覚するもの」なのであるが、「感覚するもの」は感覚には直接的には与えられない、つまり自分の「感覚していること」自体を直接的に感覚することができないからである。これが可逆性の切迫という事態である。これは、合わせ鏡の中にいれこ状に形成される無限の像のイメージである。ここで重要なのは、二つの鏡の中に形成される無限の像自体ではなく、これらの像の反射であり、対照である。それゆえ自己と他者の関係は、まさに対称的である。

他方で筆者の著述に従えば、レヴィナスは、特に『実存から実存者へ』、『時間と他者』、『全体性と無限』といった前期・中期の著作において、孤独な自己の存在から出発し、自己の同一性、自我中心性を保持しつつ、他者との対面を考える。ここでは自己と他者との関係は完全に不均衡、非対称的なものとなる。これら二つの哲学の根本的な思想上の距離を埋めるのが、本書の個々の精緻な論証と、それらからなる本書全体の念の入った構成なのである。

最後になるが、筆者は現代フランス思想の研究者であると同時に、近年増加している摂食障害という問題についても関心を寄せ、それについて身体的コミュニケーションの障害という観点から論じてもいる。無茶な減量や自傷行為によって自己の身体性を否定する患者達。こうした自己身体への拒否は、対人関係の障害と密接な関係を持つ。例えば、羞恥とは、自己の存在に関する否定的感情であるが、他者の眼差しが存在しなければ羞恥は存在しないのである。著者の視線は、摂食障害という疾患の事例のうちにおいて、自己と他者との間で交わされる、見ること、見られること、触れること、触れられること、そして言葉を交わすことという、ありふれた日常の身体経験の深層へと向けられている。本書の内容は、このような現代的な問題についての著者の洞察に、哲学的基盤を与えたものでもある。こうした点に思いをめぐらせるだけでも、本書はいつそうの関心をかきたてるものである。

(二〇〇三年 一三八頁)